

アウトリーチ

通信



第 14 号

2009 年 9 月 20 日発行
年 2 回発行

神戸女学院大学音楽学部
アウトリーチ・センター

子どものための

コンサート・シリーズ

七夕コンサート

七月四日（土）、本学講堂にて「子どものための七夕コンサート」キラキラ光る音の世界へ」（子どものためのコンサート・シリーズ第二十五回）を開催しました（第一部十一時、第二部十五時開演、来場者数計八十四名）。
「音楽によるアウトリーチ」履修生の四年生六名に加えて、賛助出演八名の計十四名が出演。本シリーズ初登場のホルンをはじめとする八つの楽器を用い、これまた初登場のダンスとのコラボレーションを組み入れて、楽器のおもしろさと演奏の魅力を主眼とするプログラムを展開しました（声



楽・藤野直、樋岡絵里那、井本綾華、ピアノ・岡崎典子、須山由梨、小幡文香、立川瑞貴、オルガン・須山由梨、フルート／ピッコロ・樋口藍、ホルン・大石圭奈子、ヴァイオリン・山崎清花（大阪音楽大学）、チェロ・島津瑠美、パーカッション・井坂道彦（神戸外国語大学）、舞踊・花岡麻里名、小松詩乃、企画協力・石津ひろの、木村友香）。

幕開けは G・ビゼーのオペラ《カルメン》より《前奏曲》。ピアノ、ヴァイオリン、チェロ、フルート、ピッコロ、ホルン、ビブラフォン、シンバル、トライアングルという大きな編成のアンサンブルに編曲して演奏しました。編曲も履修生の須山由梨が教員の指導の許に行ないました。

続いて楽器紹介のコーナーです。それぞれの楽器の特徴や成り立ち、普通の演奏法とちよつとおもしろい特殊奏法を紹介。その上で、特徴のよくわかる曲を一曲ずつ演奏しました。

まず管楽器で、フルートとピッコロ、ホルンが登場。フルートは金属製なのになぜ木管楽器なのか、フルートとピッコロの違いは何かをお話して、F・J・ゴセツクのオペラ《ロジーンヌ》より《ガヴオット》を、ホルンは昔ボスト・ホルンとして使われたことを紹介して、W・A・モーツァルト《ホルン

協奏曲第一番（二長調）第一楽章を演奏。次は弦楽器のヴァイオリンとチェロ。奏法の共通性と音域の違いを説明して、ヴァイオリンで葉加瀬太郎（情熱大陸）、チェロでサン・サンスの組曲《動物の謝肉祭》より《白鳥》を演奏し、音色を味わってもらいました。



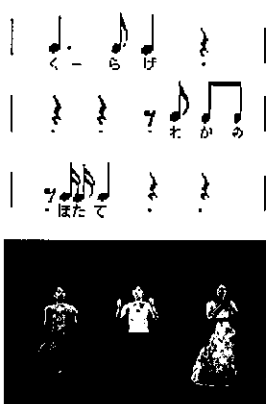
三番目は打楽器。ビブラフォンのペダルを踏まない場合と踏んだ場合の聴き比べ、小太鼓の連打と「シンバルまわし」を披露。会場からはオー！という声も上がり、予想以上の反応に思わず出演者からも笑顔がこぼれます。四番目は、体そのものが楽器の声楽。よい声の出し方を話して、メンデルスゾーン《歌の翼に》を二重唱で演奏。五番目はピアノ。「弦を」「打って」音を出すことを話して、四手ピアノ連

弾で大野雄二（ヘルパン三世のテーマ）。六番目はパイプ・オルガン。足鍵盤やストップについて実例を示した後、J・S・バッハのコーラル（目覚めよ、と呼ぶ声あり）BWV645を演奏。



続いて、本シリーズ初のダンスとのコラボレーション！まず、クラシック・バレエとモダン・ダンス、コンテンプラリー・ダンスの動きの違いを簡潔に実演。そして舞踊、声楽、ピアノ、チェロの構成で履修生の石津ひろのが編曲した、まど・みちお作詞／石黒晶作曲（つきのひかり）を披露しました。舞踊専攻生二人が今回のために振付を行い、踊ってくれました。会場からも大きな拍手で大成功でした。

ここで一転、聴衆参加コーナーです。午前の部では「くらげ」と「わかめ」



の二種のリズム、午後の部ではそれに「ほたて」のリズムを加えて三種のリズムで膝や手を打ち、リズムを交換したり重ねたりして遊びました。途中から久石譲（崖の上のポニョ）の音楽が加わり、曲に乗せてテンポを上げていきます。驚いたことに、お父さんたちまで本気で取り組んで下さって、予想以上の成功となりました。続いて権藤花代・林柳波作詞／下総院一作曲（たなばたさま）を歌いました。

フィナーレには再び全楽器のアンサンブルで、G・ビゼー作曲／中村健・須山由梨編曲《カルメン組曲》から（間奏曲）と（闘牛士の歌）を演奏し、たくさんの拍手を頂きました。

終演後は、楽器の体験コーナーです。ヴァイオリン、フルート、パイプ・オルガン、パーカッションに子どもたちは真剣な表情で取り組んでいました。

今回のコンサートでは、多彩な楽器の音色を紹介し、アンサンブルで「キラキラ光る音の世界」を楽しんでもらうことを目指しました。そのため、テンポよく進むプログラム作り（選曲、時間配分、編成）と、お客様の参加型プログラムに知恵を絞り、曲もクラシックからポピュラーまでを組み込み、楽器紹介の内容を工夫しました。また、高校時代のネットワークを生かして他大学から共演者を招いたり、舞踊を取り入れたりといった初めての試みにも挑戦しました。



って当日出演できなかった履修生二名も準備や編曲で協力してくれましたし、客席がとても温かく、リズム遊びは会場が一つになって楽しむことができました。コンサートは出演者のみでなく何十人ものスタッフの力があつて形になり、また観客も一緒に作り上げるものであると感じています。終演後、親子揃って「素敵ない時をありがとうございました！来てよかったです」とわざわざ声を掛けに来てくださった方もあり、演奏者である私たちが、改めて演奏することの楽しさや喜び、音楽のすばらしさを感じることができた機会となりました。

（藤野直、小幡典子、岡崎典子・記）



オルガニスト井上圭子さんに聞く

津上 智実

この秋（十月十七日）の「子どものためのオルガン・コンサート」パイプでド・レ・ミ〜」（子どものためのコンサート・シリーズ第二十六回）にご出演下さるオルガニストの井上圭子さんにお話を伺いました。

井上圭子さんは日本におけるコンサート・オルガニストとして先駆的な存在です。国内外で多数のコンサートに出演されて、オーケストラとの共演も多く、放送や録音など幅広く活躍です。これまでにCD十枚を出され、テレビやラジオへのご出演もあります。本学音楽学部の非常勤講師でもあり、何人ものお弟子さんを育ててこられました。

暑い夏の昼下がり、おいしいお茶を頂きながら、井上圭子さんにお話を伺いました。

問い この秋のコンサートに向けて着々と準備が進みつつありますが、今回のコンサートの目的、子どもたちに伝えたいことは何でしょうか？



井上 圭子オルガン、それも本格的なパイプ・オルガンは日頃なかなか聴く

機会がない楽器ですので、今回ぜひ子どもたちにその魅力的な響きをたっぷり聴いてほしいですね。そして音楽を楽しむ時間として、演奏会というものを経験してもらえたらと思います。バッハのオルガン曲からデイズニーのアレンジ物まで、本格的な曲から親しみやすい曲までを演奏しますし、オルガンの仕組みや歴史、バッハのことなども分かりやすくお話しします。オルガンは一つ一つが置かれる場所に合わせ設計されて建造されるオーダーメイドです。ですから一つ一つの楽器に個性があり、歴史があります。そんな世界各地の有名なオルガンを映像でお見せしようと準備を進めています。子どもたちはもちろん、大人も楽しめるような演奏会にしたいと思っています。

問い ご自身にとつてのオルガンの魅力とは、どんなところでしょうか？

井上 まず人間的な楽器であるところですね。パイプ・オルガンは笛の集まりなので、人の呼吸、息遣いと同じように、

呼吸をしています。声と同じなのです。それから、体を感じる音ですね。オルガンは建物自体が楽器で、そこに散らばる響きを楽しむのは、オルガンでなければ味わえない特別な喜びです。

問い オルガンとの出会いはいつ、どのような形だったのでしょうか？

井上 私はミッシェン・スクール（青山学院）で育ちましたので、小学生の時から礼拝でオルガンを聴き、讃美歌を歌っていました。オルガンでその伴奏をされる先生の姿が印象的でした。とりわけペダル足鍵盤を弾く姿が魅力的でした。中学三年の選択授業でオルガンがあったので、それを履修して弾き始めたのが最初です。

問い オルガニストになるという決心をなさったのはいつ頃ですか？

井上 私が学生の頃、日本にはまだコンサート・オルガニストというものが存在していませんでした。ですから決心しなかったという訳ではなく、とにかく好きで弾き続けてきたら、いつの間にかこうなっていたというのが正直なところですね。

問い オルガンについて、何か忘れ

れないエピソードがあればお話しください。

井上 オルガンは自分の楽器を持ち歩ける訳ではありませんので、行った先々の楽器を弾くことになります。するとそこに、その楽器を大切にしている人々、教会の人とか、その村の人とか、オルガンを囲む人々の輪があります。誇りをもつてオルガンを守っている人々と出会えるのが、何より心に残ることです。中でも、プラハのストラホフ修道院でオルガンを弾いた時、これはモーツァルトが旅してきて弾いたオルガンですよと言われた時のことは忘れられません。生きた歴史の中に自分がいて、その連続の中で弾いているのだということを強く意識されました。

問い オルガニストとして多方面で活躍でいらっしゃいますが、その広がりについてお聞かせください。

井上 パイプ・オルガンは教会で発展してきた楽器ですので、その原点として教会（大森めぐみ教会）での演奏を月に一回必ず行なっています。コンサート・オルガニストとしては、国内では北海道から沖縄まで演奏してきました。国外では、ドイツ、フランス、

ベルギー、スイス、スペイン、チェコ、ポーランド、アメリカのシカゴ、そして香港でも演奏しています。最近はいずみホール（大阪）での「井上圭子のオルガン物語」やリリアホール（川口）での「井上圭子、世界オルガン夢紀行」など、オルガンのコンサート・シリーズの企画に力を入れています。

問い）今後、実現したい夢をお聞かせください。

井上）オルガンを弾きながら世界を旅することです。大きな町だけではなく、小さな村にあるオルガンを一つ一つ訪ね歩くような旅をしてみたいと思います。

問い）最後に、音楽を学ぶ学生や若者たちへのメッセージをお願いします。

井上）音楽は一生学べるものです。一生かかって勉強するのですから、楽しみながら、自分を磨き上げるつもりで日々取り組んでいって下さい。一生続けて、音楽と向かい合って、自分の生活の一部として続けていってほしいと思います。

（コンサートの詳細については

8ページ目をご覧ください）

アウトリーチ海外通信

ドイツでのアウトリーチ活動を通じて

音楽によるアウトリーチ六期生

片岡 朗子



左から、白石、重里、片岡

私は二〇〇八年三月に神戸女学院大学を卒業後、ドイツのハンブルク音楽院でフルート演奏と教授法をユリア・ヴェッツェル（Julia Wetzel-Kegelmann）の許で日々学んでいます。その傍らドイツでも自主的にアウトリーチ活動を行っています。これについて報告します。

私はよくピアノの白石結佳さん、ヴァイオリンの重里美帆子さんと三人で老人ホームを訪ねています。白石さんは音楽療法士、重里さんは別の音楽

学校の学生で、友人の集まりで偶然知り合ったのですが、話しているうちに地域での音楽活動に興味があることが分かって意気投合。そこから手探りで老人ホームや教会にアプローチし、コンサートを実現するに至りました。

そこでまず苦労したのは言葉の問題です。自己紹介や曲目解説も、日本語の場合はいかにはつきり丁寧に臨機応変な対応ができるだけが問題でした。それが外国語となると、伝えたい事柄をどう言葉にするか考えるところから作業が始まります。演奏会向きの表現はどういうものかと悩んだり、最初はスラスラとしゃべれずに歯がゆい思いをしたりしました。

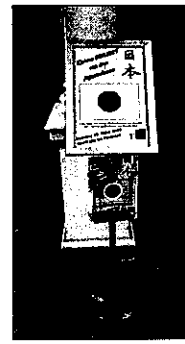
しかし「何事もまずは形から！」と考えて、各人が考えた文章を三人で添削し合うことにしました。それを丸暗記し、「とにかく伝えよう！」とゆっくりと笑顔でしゃべるよう心がけました。不思議なもので、そうすると聴衆は自然に耳を傾けてくれます。これはドイツ人の聞き慣れない日本の曲を演奏する時にも役立ちました。

日本との大きな違いはコンサート頻度です。私たちが定期的に訪問している老人ホームは三つありますが、どこも月に一度か隔月に一度、演奏会

を行っています。演奏会を開くことに対して敷居がぐんと低いのです。定期的に行なうことで次第に顔見知りも増え、雰囲気も掴めるようになりますし、聞き手からも「次はモーツァルトが聞きたいですね」とリクエストをもらうなど、出演者としても楽しく演奏を続けることができています。

では、実践例として、二〇〇九年三月十五日の事例を紹介します。場所はウーレンホルスト（Uhlenhorst）老人ホームで、聴衆は平均年齢約七十歳。まず、テレマンの〈トリオ・ソナタ〉（全四楽章）を演奏して、「コンサートを聴きに來ている」という緊張感を楽しんでもらうところからスタートしました。次に、前回の「日本の曲を演奏してほしい」とのリクエストに応じて、宮城道雄〈春の海〉をフルートとピアノで演奏。この曲は日本の伝統楽器の尺八と琴のために書かれたが、ヴァイオリンやフルートなど多くの楽器のために編曲されており、日本ではお正月によく流れる曲であること説明しました。続いて、マスネ〈タイスの瞑想曲〉、モンテイ〈チャルダシーシュ〉、シャミニナーデ〈コンチエリティーノ〉を演奏。ここで皆様よくご存じの民謡（Volkslied）を三曲、各

三番まで一緒に歌って頂きました。最後はパツヘルベル（カノン）を三人で演奏して締め括りました。



私たちはいつも日本人三人組として紹介され、老人ホーム側で作って下さるポスターにも日本の国旗と「三人の日本人による小さなコンサート」と書いてあります。最初は「なんだかもっと違う言い方があるのでは」と思ったりもしましたが、今は自分が日本人であることを誇りに思っていますし、ドイツや日本の曲を通じて多くの人々と交流を図っていったら、それは素晴らしいだろうなと考えています。こういった活動を通じて、改めて音楽は言葉の壁を越えると肌で感じる事ができました。伝えようとする心と笑顔があれば、それが世界のどこであらうとも、コミュニティの中で音楽を通して素敵な時を共有できるのではないかと思えます。



ギルドホール音楽院の「コネクト」 「アーバン・サウンズ」二〇〇九

音楽によるアウトリーチ六期生
ギルドホール音楽院修士課程

リーダーシップ専攻

東 瑛子

英国ロンドンのギルドホール音楽院は、従来の音楽専門教育に加えて、音楽を介した地域社会との関わりを強めるため、学外に向けた様々な取り組みを行っています。それらは「コネクト」プロジェクトと総称され、音楽院の教員やスタッフの指揮のもと、学生を中心に、子どもたちとのコラボレーション、アーティストとのワークショップなどが開催され、音楽院と地域社会との協働の場となっています。

その中で大きな役割を与えられるのが音楽院のリーダーシップ専攻生です。リーダーシップ専攻は音楽院の修士課程の一つで、多種多様な音楽の要素をヒントにしてオリジナルの音楽を作り出すために必要な技術、特に他者とのコラボレーション能力、リーダーシップ能力を培うことを目的にしています。私はヴァイオリンが専門ですが、二〇〇八年秋からこの専攻に

在籍して学んでいます。ここにはクラシック、ジャズ、フォークなど多様な音楽的背景を持つ学生十五名が世界各国から集まっており、すべての学生は「コネクト」の複数のプログラムに関わることが義務づけられています（アウトリーチ通信十三号参照）。

今回は二〇〇九年「コネクト」の総決算となったコンサート「アーバン・サウンズ（Urban Sounds）二〇〇九」についてレポートします。

このコンサートは、半年かけて実施してきた二つのプログラム「ワールド・イン・モーション（World in Motion）」と「アーバン・サウンズ」のグループ作品発表を軸として、二〇〇九年七月一日、バービカン・センターで開催されました。この二グループに加えて、音楽院と提携するロンドン東部の五つの小学校、四つの中・高等学校の生徒約二百人が学校毎のグループとして参加し、音楽院スタッフと小・中高の音楽教師のリードによりオリジナル曲を作り出して、それを発表し合いました。全グループは「一つの音楽的要素（モード、リズム、メロディなど）」を種として、子どもたちのアイデアを受けてそれらを成長させ一つの作品に仕上げる」という手法を共

有しますが、とりあげる音楽的要素や展開の仕方はグループによって千差万別です。ロンドン交響楽団やバービカン・センターなどのサポートにより、各団体の音楽家の参加も得て、大掛かりなコンサートになりました。

今回私がサブ・リーダーとして参加した「ワールド・イン・モーション」では、半年間にセッションを三回行い、毎回異なるメイン・リーダーが英国、ラテン、そしてアフリカの音楽を紹介して、その音楽的要素をヒントに子どもたちがオリジナルの音楽を生み出してゆきました。子どもは約四十人で、周辺の様々な学校から自由参加でやってくるので、学年や楽器、生活背景や経験値もばらばらです。このため、リーダーシップ専攻生を中心に数名のサブ・リーダーが各楽器セクションに配置されて、子どもたちのアイデアを引き出し、それらを一つの作品へ巻き込んでいくために工夫するのです。



「ワールド・イン・モーション」
のリハーサルから

演奏はメンバーが提案した音楽的アイデアによって展開され、即興を多く含むので、楽譜には記されません。このため、どのような音楽が出来上がるかはメイン・リーダーの判断と指揮、そして子どもたちとサブ・リーダーとの情報共有にかかっていると言えます。リーダーたちはメンバーのアイデアを確実に受け取り、それを曲の中に生かすよう判断しつつ、強力なリーダーシップで一つの作品にまとめ上げていく必要があります。一方、メンバーはリーダーが発するサインと指揮の意味を理解し、自分のパートがどう動くのか、曲の構成はどうなっているのかなど、細部まで把握しておかなければなりません。音楽的アイデアを自分たちが自由に発案していく上で、そこに生じるメンバー自身の創作への自主性と責任とが、楽譜という拠り所を持たないが故にくつきりと浮き出る形となります。リーダーと子どもたち、双方が等しい重さの役割を果たし、自分たちの音楽の両輪となるために、アイデアや提案の応酬が続きます。プログラムの多様性と、楽譜を持たない自由さの故に、コンサート前のリハーサルでは、リーダーも含めて全員が迷走状態に陥ってしまうこともあ

りました。五十名を超える大所帯のグループでは、リーダーが声を枯らして指導にあたる姿も見られました。一人ひとりが自分の役割を確認し、確実に務めるよう徹底することで、自分たちが生み出そうとしている音楽の形を捉えることができるよう、根気強いリハーサルが続きます。全体リハーサルは九二日行われ、各グループは半年間の取り組みで作り上げてきた曲の中から、舞台で与えられる十分間の演奏時間にエッセンスを集約させるため、楽器編成や旋律線を柔軟に変化させながらねばり強く作品を整えて、コンサート本番を迎えました。



全体リハーサル (指揮: ジョー・ウィルズ)

舞台は、電子楽器をふんだんに取り入れた「アーバン・サウンズ」に始まり、各小・中・高のグループによる作

品、音楽院の学生による作品など、多彩な曲が次々と演奏され、「ワールド・イン・モーション」へと続きます。それらはジャンルの枠を越えて自由な形をとりつつも、各グループとしてのワークが強く機能し、独特でおもしろい個性を放つものばかりでした。聴衆にとっても、各グループのアイデアが次々に飛び出る様が刺激的で、おもしろく聞いてもらえたようです。



中・高生パーカッション・グループの舞台

舞台袖では出演ぎりぎりまで、メンバーが「自分にできること」と「自分が果たしたい役割」の兼ね合いをはかりつつ、音楽の一部としてしっかりと存在するためにはどうすればよいのかを確認する姿も見られました。

最後は、音楽院卒業生でメイン・リ

ーダーの一人ジョー・ウィルズの指揮の下、出演者全員でのフィナーレです。総勢二百五十名が舞台上にがり、各グループのフレーズを巧みに連ねながら一つの曲に集約させていきます。全員が音楽の中で「自分の役割」を見出し、それを大きなまとまりの中で実現していくことによって、他ならぬ「自分たちの音楽」を創り出した喜びを強く味わいながら演奏を終えることができました。

この半年のプロジェクトで、私はメンバーと作品の中での「自分自身の立ち位置」を考える場を継続的に与えられました。年齢も嗜好も違うメンバー各人のアイデアや技量を漏れなく作品の中に生かすべく、リーダーの一人としてどう判断すればよいかを探り続けると同時に、自分自身もアイデアを積極的に提案するメンバーの一人として、柔軟に存在する必要があるました。リーダーとメンバー、この二つの視点を自分自身の中で両立させることによって、力強いアイデアを発信すると同時に広く他者のアイデアを受け入れ、それらを曲として実現し導いていく方法を、今後の音楽創作の中でさらに学んでいきたいと思っています。

(写真/Mattie Hanthey氏)

今年度の計画

今年度のアウトリーチ活動と今後の

三大学連携プロジェクトについて

アウトリーチ・センター長
津上 智実

神戸女学院大学の教育プロジェクト「音楽によるアウトリーチ」もまもなく九年目に入ります。今年の四年生八名がアウトリーチ八期生として春から実習に臨み、七月には「子どものための七夕コンサート」を成功させました(本号巻頭記事参照)。八月末には病院でのアウトリーチ実習二件、九月初旬には幼稚園での同二件を予定しています(その様子は次号の通信で報告します)。この秋には後期科目「音楽によるアウトリーチ(講義)」を履修する三年生を九期生として迎えることとなります。

通信』を定期的に発行したり、この春までの三年半、国からの補助金で活動を続けてきました。補助金終了後は、学院の特別予算に支えられて活動を継続しています。

今年度の活動としては、病院や幼稚園、小学校でのアウトリーチ実習が目下六件予定されているほか、「子どものためのコンサート・シリーズ」も、上記「子どものための七夕コンサート」(シリーズ第二十五回)に続いて、十月十七日「子どものためのオルガン・コンサート」(同第二十六回)と十二月十二日「子どものためのクリスマス・コンサート」(同第二十七回)を予定しています。十月には日本におけるコンサート・オルガニストのパイオニアとして、活躍の井上圭子さんにご出演頂きます。演奏はもちろん、お話や映像資料も入念に準備されて、楽しいコンサートになると期待されます(本号インタビュー記事参照)。

十二月にはこの春卒業したアウトリーチ七期生が知恵を出し合って出演してくれそうです。音楽の社会的使命を考える上で貴重な学びの場となるこれらの機会を、一つ一ついいねいに生かしていきたいと思っています。

今年度の大きなニュースとして、文

部科学省平成二十一年度「戦略的三大学連携支援プログラム」への採択があります。これは東京音楽大学と昭和音楽大学、そして本学音楽学部が連携して新たな教育プログラムを立ち上げようとするもので、正式な取組名称は「音大連携による教育イノベーション、音楽コミュニケーション・リーダー養成に向けて」です(以後、「三大学連携」プロジェクトと略記)。その目的は「三つの音楽系大学が各々の特性を生かした連携のもとに、教育研究資源の相互補完や学生・教職員の交流を実現し、関連団体との協働を通して、新しい音楽教育の基盤整備を行ない、社会の様々な場で音楽活動を創造・実践することができる音楽コミュニケーション・リーダー(Leaders in Music Communication)を養成すること」です。

月に「三大学交流会」として「音楽の新しい学びフォーラム」社会に飛び出す音大生たち」を東京音楽大学で開催しました(通信第十三号参照)。これをさらに発展させたのが、今回の「三大学連携」プロジェクトです。

このプロジェクト遂行のため、代表校の東京音楽大学に「連携センター」を、連携校の昭和音楽大学と本学音楽学部「連携ルーム」をこの九月から新たに開設し、インターネット・ビデオ会議システムを導入して、共通講座「音楽コミュニケーション論」の来年度開講を実現するため、三大学での具体的な協議に入っていきます。来年秋の「子どものためのコンサート」は、これら三大学連携による舞台となる予定です。本学について言えば、「音楽によるアウトリーチ」が根幹としてあり、その土台の上に「三大学連携」のより広範な教育の試みを積み上げていく形になります。従来に例のない新しい試みで課題は山積ですが、「三人寄れば文殊の知恵」と言うように、互いに知恵を出し合って、未来に向けた新たな可能性の扉を開くべく力を尽くしていきたいと思っています。

東京音楽大学の「アクト・プロジェクト」、昭和音楽大学の「アーツ・イン・コミュニティ」、そして本学音楽学部の「音楽によるアウトリーチ」は、いずれも地域社会における音楽活動を通して主体的に学ぶ場を学生に提供するという実践を積み重ねてきました。共通する問題意識と課題について議論するために、昨二〇〇八年十一

子どものためのオルガン・コンサート ～パイプでド・レ・ミ！～

- 【申込方法】 往復ハガキに、1) お子さまの学年(あるいは年齢)と人数、2) 大人の人数、3) 住所、4) 氏名、5) 電話番号、6) 返信面の宛先を明記の上、下記アウトリーチ・センターまで 10 月 2 日(金)必着でお申し込みください。往復ハガキのみの申し込み受け付けになります。申し込み多数の場合は抽選(500 名様まで)となります。

子どものためのクリスマス・コンサート

要申込。詳細は10月中旬にホームページに掲載予定

次号のお知らせ

アウトリーチ通信第15号 2010年3月発行予定

- *8期生からのメッセージ *卒業生の活動報告

など、盛りだくさんでお届けします。乞うご期待！

センターの開室時間

10 : 00 ~ 15 : 00



音楽をお届けします！！

大学やホールといった従来の枠にとらわれずに、社会のさまざまな場にすてきな音楽のプログラムをお届けします。

プログラムを、心をこめてお届けします。

お問い合わせは…

<http://www.kobe-c.ac.jp/musicdp/outreach/>

編集後記

3年半のGPを終えて、2年半の大学間連携へ、新たな挑戦のスタートです。(津上)